
Tangerine Voice

日野五十鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tangerine Voice

【著者名】

日野五十鈴

【作者名】

日野五十鈴

【あらすじ】

勤め先の倒産により職を失つた里崎実環さとざきみわのもとに新たに舞い込んだ仕事は、イケメンだけど超ド音痴！な俳優・成瀬夕月なりせゆづきのゴーストシンガーだった！！ドキドキありラブラブありの芸能界裏側（推測）ストーリー！

【1-2話完結シリーズ第1段！】

タンジュリン・ヴォイス（一）

一面グレーの高速道路を、色とりどりの車が忙しなく行き交う。

そのうち一台の運転手、里崎実環サトザキ・ミコは、ラジオから流れてくる声に耳を傾けていた。

「……それではリクエストにお応えしまして、曲は15年前にデビューハーメドの『永遠に』1年半にして電撃解散した伝説のバンド、ハーメドの『永遠に』です。どうぞ……」

「…………」

キーボードの纖細な旋律から入つて、次にドラム、ベース、ギターが伴奏に“厚み”を加える。

そしてその上から、ボーカルの甘く切ない男声が車内に響き渡つた。

「……君と一緒に生きてゆくなら…守り続けたい明日がある…」

実環はそのボーカルの声に合わせて口ずさむ。

それはラジオから流れてくるものと同じくらい、甘く切ない歌声だった。

： 時は1ヶ月前に遡る。

「それでは2人の幸せを祝して、カンパ～イ～！」

実環たち仲良しグループはアパートの一室に集まって、手に手にグラスを持って乾杯した。

友人の結婚おめでとうパーティーというやつだ。

実環はいわゆる二ートだった。短大を卒業してちゃんと就職したのだが、この不況の煽りを受けて勤めていた会社が倒産し、社会人生活2年目にして失業保険で生活するハメになってしまったのである。

不況のためか次の就職先も決まらず、よつて昔の仲間が集まるホームパーティにも時間はあるので出席できたのだが、今になつて考えてみれば、これこそが運の尽きだった。

最初は当たり前のように新婦の馴れ初め話から始まったのだが、会話は次第に『余興で誰が何を歌うか』という話になり、結果『1番歌の上手い実環がソロで結婚ソングを披露する』ということになつたのだ。

「私にそんな大役、務まるかしら……」

「そんなに心配しなくても……だって……ねえ？」

皆は目を合わせながらクスクス笑う。

「短大時代、合コンで男全員カラオケで泣かしたのは誰だったかしら？」

「あわわ忘れてって言つてるじゃんーーー！」

事実、実環は合コンで男性陣をことごとく（歌で）泣かせてきたのだ。原因のひとつは、あまりにも実環の歌声がラブバラード向きで感動的だったから。もうひとつは、男でもなかなか歌いこなせない男性シンガーの名曲を、実環がいとも簡単に歌いこなしてしまった。

「実環が歌えば新郎もイチコロで泣くよ～」

新婦はともかく、新郎を泣かして意味があるのか？ 新婦友人代表なのに。

「あ、ねえ見て見てーー！『3分偉人伝』の俳優3人組、歌手デビューダッて！」

「マジ！？」

流行に敏感な若い女たちは、BGM代わりにつけておいたテレビに一斉に群がる。

『クイズ3分偉人伝！』はその局の看板番組で、毎回高視聴率を記録する超人気番組だ。中でもレギュラーの3俳優の人気が高く、この春ユニットを組んで歌手デビューするといつ。

「えーアタシ偉世^{イヨ}つち好きなんだよねー。絶対CD買うう！」

「偉世つち可愛いもんねー。でもわたしはやっぱり、**大さんかなあ**」
マサル

「大さんだつて！ あいつ妻子持ちのオッサンじゃん」

「アーツるさい」

「やつぱり、夕用ぐんでしょー。何だかんだ言って今1番人気の若手俳優だし」

各々の好みをよそに、テレビの向こう側で**唐川偉世**、**渡辺大**、**成瀬**
カラカワ・イヨ
ワタナベ・マサル
ナリセ
夕用がにこやかに手を振っていた。

タンジエリン・ヴォイス(2)

(…困った…)

西岡嶺文ニシオカ・ミネフミは親族待合室で頭を抱えていた。彼の長い音楽活動の中、今だからこそこんな難しい仕事を引き受けたことははない。

(…渡辺は文句なし…唐川も充分イケる…あとは…)

西岡の頭の中で、あの声がこだました。

『…成瀬なんだよなあ…』

「…成瀬なんだよなあ…」

「何か言いました？ 叔父さん」

西岡は甥に『なんでもない』と言った。そうだ。今日は甥の晴れがましき結婚式なのだ。祝つてやりたい気持ちは十一分にあるのだが、彼の心はどんより曇り空だった。

数日前、親睦と通してカラオケ店で“仕事”していたときは、比較的西岡も楽観視していた。

年齢のせいでリズム感を心配していた大は、ソロデビューしても差し支えないほどの歌唱力の持ち主だったし、逆に若すぎて声量を心配していた偉世は、グループで活動するには何の問題もない優等生だった。

だが、夕冉ときたら。

音感、リズム感、声量、共に最悪。ド えもんのジャ アンとタメで張り合えるどころか、「ゴジラ」がお経を唱える方がはるかにマシだ。それくらい酷かったのだ。デビューが決まってから今まで個人レッスンしても暖簾に腕押し糠に釘、何ひとつ改善しないまま今日に至った。

（…）んなことしてる場合じゃないんだけどなあ…）

式の方は何の問題もなく着々と進み、ついに新婦友人代表挨拶となつた。

話を聞いている分には、あの里崎といつ若い女性が一曲歌つらしい。

（…あの娘が歌上手かつたら、成瀬の代わりに歌わせようかな…なんてな…）

いや、まさかそんな。若い女性が成年男子の代わりに歌を歌うなんて出来るわけが…。

「…君と一緒に生きてゆくなら…守り続けたい明日がある…」

瞬間、西岡は我が耳を疑つた。

この曲を歌つてるバンド…“ハーメド”のボーカル『Natsu』は、百年に1人と謳われた奇跡の歌声の持ち主だ。素人が安易に歌えば、確実にボロが出る。しかも『Natsu』は男なのだ。

だが、この娘ときたら。

リズム、音、声量、共に完璧。気がつけば会場内を涙で埋め尽くしている。なんとすれば新婦どころか、我が甥まで涙している。どっちの意味で泣いてるのかは考えたくない。

「…『大好きだよ』…」

…拍手が沸き起るまでの間に、感動のあまりしばらぐの時間を費やした。

西岡は声をかけるべきか迷っていた。確か彼女は名前を『里崎』と言つたか。

（まさか…いや、でも面影はある…）

もし予想が当たつていたら…そしてもし彼女を夕月の代わりに使つ

たり。。

『あこひ』の耳に入りやしないか……？

「お幸せにな
」

そう言つて彼女は会場を後にしてしまつとした。

西岡は焦つた。

（……の機会を逃したら……確実に次はない……）

彼女を夕用の『ゴースト』として捕らえなければ……

「ももももしへのお嬢さん……」

「ああああああああああああああ……」

……あまりの挙動不審ぶりに、西岡は瞬時、変質者扱いされた。

タンジエリン・ヴォイス（3）

レコードティングが終わつたあと、一回はほりつと溜め息をついた。

中でも一番最初に反応を示したのは、最年少の唐川偉世だった。

「すごいですー！　え？　本当に素人の方なんですかー！？」

あまりの感激ぶりに、ホットプレートのエビみたいにピヨンピヨン跳ねている。とても19歳の男の子がとる行動だとは思えない。

「本当ですね。素人とは思えない……」

一方紳士然と言葉を挟んできたのは最年長の渡辺大だ。

戦隊モノで一躍有名になり、今や若い奥様方のアイドル的存在だが、残念ながらすでに妻子持ちだ。ちなみに年齢は27歳。

「路上でライブやつてたとか、そういうの？」

「いえ、以前は会社で事務してましたけど……」

以前は、といつて視線をさまよわせる。悲しくも今は失業保険で生活している一軒家状態。

（…ふ…なんてつたつて、家計がかかってるもの）

実環は塵つぶちの必死の形相で迫つてきた西岡の顔を思い出した。

『ビーかビーかビーか！　成瀬のゴーストシンガーになつてやつてくださいッ』

…あの叫びが耳にじびりついて離れない。

（…そりやねー…あのカオでの歌声つて…ギャップがあるじこりじゃないわよあれは…）

一度だけ、夕月の歌を聞いたことのある実環だが、聞いた瞬間、凍りついた。

ド　えもんに例えるなら出　杉くんがジャ　アンの声で歌つてるようなものだし、ガメラがオペラをやってる方がはるかにマシだ。それくらい、彼の見た目と歌声にはギャップがあつた。

一方で実環はといえば、中学・高校時代は合唱部の大會にスカウトされ、合唱コンクールの自由曲、『流浪の民』ではソプラノ・ソロを担当したこともある。今回も基本的なレッスンを受けただけであつという間にレコードティングだ。ありえない。

（…ビーフィーであれだけのお金を出すわけだわよ…）

そしてあの音楽プロデューサーはやめと泣いた。

『もうもつ頬しかいないんだあッ。君の歌を聴いてこれはと思った。ただの歌の上手い人じゃだめなんだ！　夕月の声に近く、時間の自由が生き、何より音楽を心から愛してくれる人でなければ』

：「実環はその勢いと高額報酬に根負けした。

実環はよくよく考えた結果、そう悪くない話なのではと思いついた。つまり、ちょっと変わった長期のアルバイトと考えればいい（と無理矢理思い込むことにした）。

しかしである。

「それくらい、できてくれないとおれが困るんだよ。ゴーストシンガーさん」

壁に背を預けてのんべんだらりとしていた夕月に言われ、実環は堪忍袋の緒が纏めてブチブチと切れるのを感じた。何様だ、コイツ。

「…あんたのアイドル性を保つために、代わりに歌つてあげてるんでしようがッ」

夕月は前髪をさらりと払つた。

「それが金を貰つほどものか。親のスネかじつてる二ートのくせに」

「失礼ねっ！ ハロー・ワークにはちゃんと申告してるわよ！ それ言つときますけど？ 家賃、食費、光熱費は全部自分で出しているのよ！」

二ートと言つてもそれは名ばかりで、彼女の父母は仕事の都合上世界中を飛び回つており、滅多に家には帰つてこない。よつて実環は失業保険で独り暮らしをすると言つても過言ではなかつた。

まあまあ、と2人の間に大が仲裁に入る。

「これから長い付き合いになるんだから、仲良くしようよ。それに、
同じ年でしょ？ 君たち」

「…………」

「…………」

…えええええーつー!?

「同じ年なのか!?

「こ、21歳なの!?

とてもそつは見えない、と異口同音。

タンジエリン・ヴォイス（4）

彼等は、グループ名を『まんペーゆ』といつ。

由来は、番組でゲストが持つてきてくれた『カイみかんだ』。

「うわー大きなミカン」

はしゃぎ騒ぐ偉世。

「偉世」、これはボンタンって「うんだよ」

そう諭す大。

「バンペイコともい「うんですよ、これ」

ゲストさん。

「ああ、じゃあ」

司会者。

「渡辺と唐川と成瀬でグループ名、バンペイコ

いいなあ、と1人悦に入る同会者。

「グループ名『ばんpeiゅ』…いいなあ」

そんな冗談からグループ名が決まつてしましましたとぞ。

「晩^ばです」

「白^{ペイ}です」

「柚^ユです」

上から順に大、偉世、夕月である。

それはともかくとして、今日はCD発売直前企画、番組内での生歌披露収録の日だった。

もちろん実環も舞台裏でスタンバつてる。

「うー、信じらんない。なんでこ'んなことに

「仕方ないでしょ、実環ちゃん。成瀬のゴーストやるつて、承諾しちゃつたんだから」

実環は舞台裏で夕月の出番を待つていた。もちろん代わりに歌うためである。

「だから、舞台裏…『ラマラマ』の“撮影の裏側”でしか見ない
よつの舞台裏…」

舞台裏に潜入するのも初めてなら、テレビ局に来るのも初めてなのだ。こういったことは夕月を尊敬する。こんなスタッフや観客の大勢いる中で、お芝居なんてとんでもない。

「…う…私、吐きそう…すみません。お手洗い行つてきますー。」

実環は緊張のあまりその場から脱出した。

「あ

「あ

トイレから戻る途中、エレベーターの前で天敵・夕月と鉢合わせてしまつた。

びつやうあうらも休憩に入つたらしい。

(…う…なんか気まずいなあ…)

「ふん」

と、隣から高飛車な声が聞こえた。

「調子ぶつこいてんじゃねーぞ」

「……え？」

実環は一瞬、何を言われたのか分からなかつた。

「それ、どーゆー意味よ…」

「氣に入らねーんだよ…」

夕月は言い捨てるようにして言葉を放つた。

「お前みたいなド素人が、おれの代わりに歌うなんてよ…。」

「だつ、だつて成瀬くんは…。」

「ちょっと歌が上手いくらいで、偉世つけにはベタベタされるし」
ドキッ。

「大臣にも太鼓判押されていい氣になつてるしよ…。」

ドキドキッ。

「お前みたいな社会の負け犬が、楽に稼いでると思つとムカつく
んだよつーー！」

「…………ッ」

社会の負け犬……そう言わると反論できなかつた。でも言いたいことはある。

「……そりや……私は成瀬くんから見たら……社会の負け犬かもしれないよ……でも……でも……」

ドアが開いた瞬間、キッとばかりに見返す。

「成瀬くんのよいうな卑怯者よつマシだよ！ 不満があるなら初めから西園さんには断ればよかつたじゃないーー！」

「んだとおーー？」

閉まるエレベーター、女相手に手をあげる夕田。

「どうじつ意味だよそれーー？」

「そのまんまよーーその手え離しなさいよつーーー！」

その瞬間。

ガタン！ と急にエレベーターが動かなくなり、2人は少しの間、宙に放り出された。

「……いつ……てえ……」

「何なのよー体……」

フツ、とエレベーターの明かりが消える。

「……え……？」

「なに……？」

夕月は全階のボタンを押した。しかしエレベーターが動く様子がない。

「つ、何なんだよ！」

今度は非常用ボタンを押して助けを呼ぼうと試みるが。

「……繫がらない……」

「うそ……それじゃ私たち……」

……2人はエレベーターの中に閉じ込められた。

タンジュリン・ヴォイス(5)

夕月が帰つてこない。

「まあ～た成瀬王子さまの気儘が始まつたか…」

「仕方ない。曲のシーンだけ最後に回して成瀬使わないシーンに行
くぞ」

「…お密さん、焦りつしゃいますね」

ショーガないだろ～…スタッフの会話を聞いて、またか、と西岡は
思つた。と同時に嫌な予感がした。

実環も帰つてきてないのだ。

(…2人になにか、あつたのかな…)

西岡の予想は、当たつていた。

「お～、開けよ～！」

夕凪はジンジンヒ、開かないエレベーターの扉を乱暴に叩いていた。

「開けってんだよおッ！…」

今度は肩で体当たりした。しかし悲しきかな、止まつたエレベーターは動く気配もない。

「ちよつ…成瀬くん…危ないよ、衣装汚れちゃうよ、それ以前に怪我しちゃうよ…」

実環の言葉を素直に聞いたわけではないが、夕凪はエレベーターに手を付かずするなど崩れていった。

「何なんだよ…ちくしちゃう…」

「成瀬くん…」

「この田のために一生懸命頑張ってきたんだ！ レッスンだつて一度も休んだことない！ 誰か、誰か開けるよ… 誰かあつ…！」

（…成瀬くん…）

夕凪は扉をガリガリと捶くと、ちくしちゃう…と呟いた。

「やつと…やつとステージの真ん中に立つたの…」

…ああ、やつが…と実環は思つた。

「の日のために、成瀬くんは長い間苦労してきたんだもんね。

（まあ…歌は実を結ばなかつたみたいだけど…）

……ただの嫌な奴じやなかつたんだ。

いくらなんでも遅すぎる。

「もう撮るシーンも尽きた…おい誰か！成瀬のこやつなどいりをしらみ潰しに捜してこー！」

「はい！」

その会話を聞いて、西岡は確信した。

(やがて実環ちゃんとにかくあつたんだ!)

変な誤解するなよ。

「だれかー！ 助けてくださいーいー！」

「おい」

扉を叩いて叫ぶ実環に、扉にもたれ掛かって座っている夕月は無感動に呼び掛けた。

「このエレベーター、スタジオから一番遠いんだ。こんなに時間食つちや誰も来やしないよ」

そして極めつけの一言を言つた。

「諦めろ」

「…諦めたくない…」

ポソリと呟いた反論に、夕月は顔をあげた。

「…里崎…？」

「だつてここで諦めたら、成瀬くんの努力が無駄になつちやうせん！」

「里…」

「成瀬くんだけじゃない」

実環は汗だくの顔のまま微かに笑つた。

「大さんと、偉世つちと、…私たちの、大事なデビューだもん」

「…里崎…。……」

そしてまた扉をバンバン叩く。

「誰か」

「誰か来てくれーっ！！」

その声に実環は振り返った。

夕用が扇を叩いて大声で叫んでる

成瀨 < h > !

お前が読めてないのは
おれが読めるわけはいかないだろ?

そして俳優だからこそよく似合う、男前な笑みで付け足した。

「せーので一緒に戻出でぞ」

卷之三

いたか？」

「ダメです。そつちは」

「いなかつた。1番自信があつたところだつたんだけどな……」

その場を重い空気が包む。

「……」うなつたら、今日は歌の収録なしで切り上げますか？」

「……やうやくしかないな……」

「…………」

そのとき、わざわざ階段を上つたりしきトレビ関係者が意味深なことを言った。

「だ一めだ。トレビーター動かねーよ」

「トリも古こですかねえ」

西園はその会話を聞き逃さなかった。

「……まさかー」

西園はトレビーターまで走り出した。

「西園ちゃん？」

「大さんつーー！」

「偉世つちーー！」

2人はせーので声を出し、扉をバンバン叩いた。それでも一向に助けが来る気配がない。

「ダメだ…誰も来ない」

疲れはてた夕月はざるざるとその場に崩れ落ちた。実環も喉の痛みに思わず咳をする。

（…もうダメなのかな…）

実環は首にかけていたタオルに咳をこぼした。

「…あ…」

このタオルは…。

『実環ちゃん、これあげるよ。関係者限定の貴重品だよ』

それは『ばんぺいゆ』結成記念に作られたタオルの試作品。ミカンの模様に“ばんぺいゆ”の文字が刻まれている。

『す』いですー！え？本当に素人の方なんですか！？』

『本当ですね。素人とは思えない…』

…歌うことが何より好きだった。

いつか人前で歌いたいと思っていた。

（……諦めたくないよお……つ）

実環はタオルに顔を埋めた。

そして、叫んだ。

「西岡やーんッ……」

「……実環ちゃんの声だ！」

ちゅうじゅんのとき、西岡がエレベーターの扉に耳を宛がっていた。

「やつぱつ」の中だ！ 至急関係者を……」

「はーっ……」

……そして間もなく。

2人の頭上から一筋の光が射し込んだ。

光は徐々に広範囲に渡り、エレベーターの上方にいたスタッフや西岡、それに報せを受けて駆け付けた大や偉世の姿が見えた。

「実環ちゃん！」

「夕月！」

まず夕月が先に救助され、彼の差し伸べた手を握つて実環も脱出した。

「大丈夫か2人とも。怪我はないか？」

「はい。あ…」

実環は思い出した。あれだけガンガン体当たりした夕月は大丈夫なのだろうか。

「成瀬くん、怪我…？」

「ふん。お前に心配されるほどヤワじゃない」

「むつかー！ 何よ、心配して話してあげてるのに…」

「はいはいそこまで、と大が間に入った。

「怪我がないなら急いで… お客様を待たせたら失礼でしょ

「ううー、信じらんない。なんでこんなことにして…」

「実環ちゃん、それ、さつさも聞いた…」

と、『一ラスが流れてきた。

「あ。ほら、そろそろ出番だよ」

「もう分かってますってHー」

あれだけ不安の色が濃かつた実環の顔が、マイクを持った途端、キリッとした表情に変わる。

結婚式で、レコードティングで。その横顔を見るたびに西岡は、今はビビりこむとも知れない『友』のことを思い出すのだ。

(…今回の『…』あこひる『…』ばらなきやこいけどな…)

「…もつと強く、なれたらいいね…もつと強く、なれる気がするよ

…」

歌い終わった途端、お密さんから『あやー』といつ歓声があがつたのは言つまでもなかつた。

タンジエリン・ヴォイス(6)

時は流れ…。

「デビュー曲『晩白柚』が初登場売上第2位!-?」

「しかも4週連続う!-?」

すごい。企画モノにしては凄すぎる快挙だ。そこに丁度よく、喫茶店のマスター・大村八作氏オオムラ・ハツサクが、人数分のカフェラテを持ってきた。

喫茶・歌音カノン。そこはマスター・大村と西岡が旧知の仲といふこともあり、よく打ち合わせに来る店だ。芸能事務所も近いため、よく芸能人も訪れるという。しかし今は早朝のためか、西岡たち以外に客はない。そこを狙つての打ち合わせだ。

店内にはマスター・大村と西岡プロデューサー、夕月のゴーストンガード、それに『ばんpeiゆ』の3人だけがいた。

「しかもしかも、もう2曲目ができるって!-?」

「うん。…それで、ここからが本題なんだけど…」

西岡はニヤリと仕事人の笑みを見せた。

「ばんpeiゆ新曲発売を記念して、全国4ヶ所を回る計画があるんだ

。 。 。
。 。 。
。 。 。

「...え...」

ええええええーつー?

「全国を回るって、あの、ツアードですか?」

「そ」

「...『4人』で?」

「そ。ああ、もちろん実環ちゃんはホテル別室だけど」

これには夕月が突っ込んだ。

「なーんで里崎は個室なのに、おれ達は相部屋なんですか」

その言に実環はムッとした。

「なによ。その言い方」

「べつに間違つたことは言つてない」

「ぐう～腹立つ。その自分はお前なんかより数段上なんだぞって言
い方が！」

「間違つてないだろ。おれは売れつ子の役者で、お前はパー太郎」

「失礼ね！ 好きでパーになつたわけじゃないわよ…… それ今まで
言つながら……」

実環は立ち上がり食指を立てシットと夕月に突きつけた。

「全国巡回中、私は移動車の中で寝泊まりするわつ……」

「えつ、実環ちゃんさんちゅうヒマジ……？」

「ほーう。んじゅ、やれるもんないやつてみな」

「ええ、やつてみせよひじやないの。西岡さん、せつこひじで私の部屋は用意しなくて結構ですか？」

大と健世はどこから指摘すればいいもんかと、齒んで結囃べつにもできなかつた。

それは西岡も同じだつたが、頭の中では別なことを考えていた。

(…実環ちゃんの部屋…振り付け師の立花ちゃんとシインにしてお
くか…一応)

1日目。

「みいみい」

「あれ？」

実環はホテルから口ヶバスへ（風呂とトイレだけはホテルで済ますことにした）移動中、箱に入った子猫を見つめた。

びつやから捨て猫らしい。

「可愛い～白猫」

「みいみい」

昔の某CMではないが、そのキラキラ何かを期待するような瞳に、実環は負けた。

（…私の生活も、この仕事のお陰でだいぶ楽になつたし…子猫の…
匹くらい、いいかな…）

「…お前、うちの子になるか？ おー

「みいみい」

「そつか。おいで」

実環は子猫を抱き上げた。

「一緒に帰る」

…その晩、1人と1匹は移動車の中で眠った。

2日目。

「可愛いですね～白猫！」

移動中の話題は、もっぱら実環の拾つた猫に集中した。

「名前はもう決めたの？」

猫と遊ぶ偉世を横目に、実環は大の問い合わせに答えた。

「はい。みいみい鳴くので、みいちゃんにしました」

「ぶつ…変な名前…」

こんな憎まれ口を叩くのは1人しかいない。

「成瀬くん？ ひどがどんな名前つけたっていいじゃない

「だったらもつとセンスある名前にしような」

しかし「」は多勢に無勢。

飼い主様の『機嫌をそこねた夕月は、鋭い猫パンチをお見舞いされた。

夜。

「じゃあ私たちもそろそろ寝よっか」

そのとき、後部座席のドアがガラツと開けられた。

「…な…」

実環の声が『な』で止まってしまったのは、その客が意外な人物だつたからだ。

「成瀬くん！？ なんであなたがここにいるの！？」

「昼間の復讐しに来て何が悪いんだ？」

びいともそこも悪いわ、と思いつつ、実環は夕月の様子を見守った。

案の定、夕月は猫の尻尾を掴んで逆さまに宙吊りした。

「みーい」

「ぎゃー成瀬くん！ あんたなんてことするのよ！？ 可哀想にも

程があるわーー。」

実環は猫を奪取すると、可哀想にねー、と膝の上でナゴテナゴテした。

「…………」

夕月は帰らずにその様子を見ると、不意にみいちゃんと名付けられた白猫に手を伸ばした。

「あああー? またあんたそーやつて…」

しかし今度は意地悪せず、腿の上から座席に退かしただけだった。

「?」

「はい、交代」

そして今度は実環の太ももに頭を乗せる。

「なつ、なつ、な…!?

「いーだろこれくらい…疲れてるからさ…」

だつたら帰れ、と言つてやりたかつたが、その本当に疲れた様子に、実環は文句を言つ氣も失せた。

しばらくそのまま長い沈黙が流れ…。

「… なあ」

不意に、夕月が田を閉じたまま口を開いた。

「里崎の親つて、どんな奴だ？」

「なんでそんな」と、と思ひながらも、実環は分かる限り答えてやつた。

「…私の親は慈善家で、世界中あちこち飛び回つてゐる。だから私んちはいつも私1人だけ」

「…あとは？」

「昔、ちょっとだけ音楽をやつていたわ」

「びつて、と夕月は唇を歪めた。実環のあの音楽性は一部分血か。

「成瀬くんの、『西親は？』

「…夕月だ」

「え？」

夕月は半分目を開けた。

「下の名前で呼べよ…。大人と偉世つむぎやーなのに、不公平だ

る」

「不公平つて…」

そういう問題じやないだうつたが、なるほひ、よくよく考え

てみればそんな気もした。

「じゃあ夕凪くん。…あなたの」両親は?

夕凪は腕を額に当てて答えた。

「親父は借金苦で病院行き」

実環は愕然とした。

「…お母様は?」

「おれが小さことに、男と逃げた」

「…そんな…」

実環は、そういう家庭といつのは、小説やドラマの中のものでしか
ないと思っていたので慌てた。

「…」めんなさい…」

「なんでお前が謝るんだよ」

「だつて…」

「中の頃だったかな。ダチがさ、勝手におれをオーディションに
応募しやがって、俳優業やることになつたんだけど。いま思えば
それが救いだったのかもな」

「…ねえ」

「なんだ」

実環は絞り出すよつにして言つた。

「私のこと、『実環』で呼んでもらつてもいい?」

「……なんで」

「……なんとなく」

嘘だつた。家族の愛情に恵まれていない彼の、少しでも家族のよつな相手になつてあげたいと思つたからかもしれない。

「……嫌なら、べつにいいけど」

「……。……こ……」

実環。

そう言つて夕月は実環の膝枕で寝息を立て始めた。

3回目。

「今日で最後だ。みんな、気合を入れて頑張るよつ」

「はいっー。」

返事をしたその時、実環は喉の異変に気がついた。気休めに咳払いする。

「実環ちゃん？ どうしたの？」

「だいじょう…、ー？」

実環は口を押さえた。

「実環ちゃん？」

実環は首を勢いよく振った。

…声が出ない。

タンジュリン・ヴォイス(7)

（…。どうして…誰が出なくなってしまった…。）

今日がシアター最終日なの。

「初夏とはいえ、車で寝泊まりしてたからなあ

「かかか感心してた場合ですか西園さん…。」

偉世が慌てた様子で叫ぶ。

「どうしますか。」そのままでは今日の公演は中止…

「そんなこと出来るわけないだろーーー。？」

「でも実環ひやんが声を出せなくなつたのなら…。」

「…………

「…………

数秒間の沈黙。

「……。あの」

それを突き破ったのは、夕月だった。

「なんだつたら、おれが歌いますよ」

……。

……。

……。

それは新たな沈黙を呼んだ。

「……え……」

えええええーつー？

「無理！ 絶つ対に無理ですからー。」

「考え方直せ、夕月」

「そもそも自分の力量を分かつて言つてるのかー？」

続けざまに偉世、大、西岡から反対ゴールが起ころる。実環も首を勢いよく横に振つた。

まさか！？ あの夕月が歌うつて言つた！？

ゴジラやガメラにも負けているあの夕月が！？

しかし夕円は俳優然とした態度で一いつと笑った。

「分かつてないなあみんな。おれの本業は歌手じゃなくて、俳優なの。アタマアタマアタマ、いじ使わないとな~」

「…………

「…………

「…………

しかしコンサートを中止するわけにはいかず、結局は夕円の案によるしかなかったのだ。

(…本ひ端でじゅうね…何か策があるのかしら…)

「冗談じやない。策も無しに歌を披露じみつむのな~り、お密セセダソ
引きじてじゅう。

悪足撫あにうがこやのど飴など色々試してみたが、やつぱりダメだ
つた。

もつあとほ夕円の演技力に頼るしかない。

「今日お集まりの皆ひと

大。

「僕たちのために来てくれてありがと」

偉世。

「それでは、聴いてください」

夕月。…心なしか声が掠れてるような…。

「…期待は裏切られるためにある…夢は破られるためにある…そんな悲しいこと言わないで…また夏はやつて来る…」

3人で歌うパートだ。

そここのところは、まあ問題はない。ツアーの疲労もあることだし、大と偉世に任せたおけば、口パクでもなんとか誤魔化せる。

問題は夕月のソロパートだ。曲の終盤に用意されている。さすがにそれは口パクで誤魔化せないだろう。

「…ううー…」

実環は居ても立ってもいられず西園に詰め寄った。ヒンヒン声ならなんとか出せる。

「あああ～もう見ていいられませんよ！ 私にマイク持ってきてください

卷之二

「えー? だつて実環ちゃんその声じや……」

とかなんとか言つてゐる間に、夕月のソロパートに突入した。

（一）一體化

むかぬやうなソロハート！？

ふと、夕用がセット裏にいる萬歳に口説けした。

- 1 -

「 もちろん、緒に! 」

そしてマイクを観客席に向ける。マイクパフォーマンスだ。

「希望は戒めるためにある……愛は棄てられるためにある……そんな悲しき」と言わないで……もう一度やってみよう……」

..... !

なんと自分の代わりに観客に歌わせたのだ。

「ありがとう！」

アタマ使つて、これかい。実環はちょっとガクッと来た。

（…まあ、機転がきいてるちやきいてるけどねー…）

「…また夏はやーつてー来るからー」

そして歌は何事も無かつたかのように終わつた。

途端、観客席から『あやー』という声があがつたのは言つまでもない。

誰かが言つた。

大成功だ。

「大成功だー！」

「3人にインタビューをー！」

ステージ裏にいた実環はマスコミ関係者にドンと突き飛ばされ、次に目を開けたときには、ばんぱいゅ3人は取材を受けていた。

「…………」

…ああ、さうか、と実環は思った。

（生きる世界が違うんだ…）

夕月はみんなのアイドルで、自分は『ゴーストシンガー』。

舞台の光と闇に生きる者。

『実環』

夕月にその名を呼ばれるのは、昨日の夜以来で、改めて思い返すとなんだかへんな気分だった。夕月の方は百万回でも呼んでいたかのよつこ偉そうだったけど。

『実環』

もう一度、思い出した実環だったが、ぶんぶん頭を振つて追い払つた。

（ちーて。私も早く喉を治わなくちゃ）

仕事のために。

「…驚きましたね」

調査書を見て、ぱんぺいゆのマネージャーと、夕月の所属している芸能事務所の女社長は苦笑した。

「里崎実環の身元といつたひ…」

「…歌の」ととこ、驚かされてばかりね…」

「どうしますか」

女社長は実環を見て薄く笑った。

「…私にっこ考えがあるの」

…数ヶ月後。

季節も変わり、ばんぺいゆの新曲レコーディングも終わり、今日も今日とて舞台裏で「ーストシングしていた。

いつもながら「仕事終了」なのだが、今日は勝手が違っていた。

「実環ちゃん」

呼んだのはタ円の芸能プロの女社長だった。

「あ、社長さん」

「ちよつと来てくれない」

.....。

「はい？」

「はい、出来上がり」

実環は何が何だか分からなかつた。

服を着替えさせられ、メイクをされ、髪をセットされ、さながら芸能人みたいな姿になつていた。

「良いわ良いわ！ 私の思つた通り！－！」

「？ あの…これは、一体…」

女社長は満面の笑みで答えた。

「実環ちゃん、ステージに立ちたくない？」

「えつ！？」

…歌うことが何より好きだつた。

いつか人前で歌いたいと思っていた。

「そりや…」

夕月のいる世界に？

「でも私なんかムリ……」

「いいえ、行けるわ！　スポットライトの下に！」

女社長は実環の肩をガシッと掴んだ。

「西岡嶺文のプロデュースで、里崎実環、貴女は歌手デビューするのよー！」

タンジュリン・ヴォイス(∞)

「レビュー曲が初登場売上1位を記録しました。

「これも実環ちゃん。いつもも実環ちゃん！ 音楽雑誌などにも実環ちゃんの記事ばっかりだね～」

「レビュー曲が今アリスマの主題歌に抜擢されると裏から根回しされ、視聴者からの問い合わせが殺到。

有名な西岡嶺文のプロトコースト曲もあり、ラジオやテレビの出演依頼も舞い込んで、里崎実環は一躍時の人となつた。

「さすが夏ちゃんと凛ちゃんの娘だけあるね。カリスマ歌手だつてや、すごいね～」

「…すいへなことですよ」

実環は溜め息混じりに言った。

「今まで学校でやつてたことがメディアになつただけ。それでカリスマ歌手だなんて、芸能界つて変なところ…」

西岡は頭をボリボリと搔いた。

「…で、実環ちゃん…ばんぺいゆの仕事の方は…その…来てないみ

たいだね…

「言つてはいけなかつた、と氣付いたときには遅かつた。

実環は田を潤ませると、西園の胸元にガシッと掴みかかつた。

「わおおなんですかおおおおおーお互に忙しくてすれ違いばかり…！」

特に夕月など新ドラの仕事（主演）が舞い込んで、文字通り寝る間もない忙しさ。よつて“ばんぱいゆ”歌手活動はひとまずお休み中。

「収入は増えたけど自由がない！夕月くんに会いたいよーお

「ちよ、ちよっと実環ちゃん。声が大きいくつー！」

一方その頃。

「成瀬くん成瀬くん」

夕月はイライラしながら写真撮影に挑んでいた。

「なんスか？」

「もつと笑顔つべつべよ。俳優でしょ？ キハナ」

「…」

「ですか？」

夕月は、殺人快楽者が血を見たような笑顔を作った。。

「マネージャーさん」

「す、スマスマセント！」

《会えないのがこんなに苦しいなんて…》

『3分偉人伝』の収録後、大がにこやかに訊いてきた。

「その様子だと、実環ちゃんに嫌われた？…ぶつ」

大は顔に音楽雑誌の開いてる面をお見舞いされた。

「つむぎーー 振られた方がまだマシですーー」

「…ですよね…」

偉世がその音楽雑誌を拾い上げた。

「実環さん、このじろ人気爆発ですもんね。気持ち云々以前に会え
ない、か…」

「おーい。渡辺、唐川、成瀬」

そこに西園が入ってきた。

「あ、西園さん。どうもお久しぶりです」

「聞いて喜べ。近いうちに“ばんぺいゅ”新曲レコードティングだ」

「えつーー?」

途端に夕月の顔がパツと輝いた。

「それって、あの、実環も来るってことですか?」

「当然だろ? お前の歌声なんかレコードティングできるか

ひやつぼーう! ヒテンションが急上昇する夕月。

その様子に3人は呆れた溜め息をついた…。

実環のケータイから『晩白柚』が流れる。メールではなく、電話だ。

(誰かしら…って、夕月くん!?)

と、実環は辺りを見回した。ついかり電話に出てスキャンダルにでもなつたら困る。

「どうしたの? 一体

「聞いてるか？ 新曲レポートデイニングの話」

「つづん。新曲？ 本当…？」

「実環の声が嬉しげになる。

「嬉しい…久々にみんなに会えるのね」

「大さん、偉世つち、…夕月くん。

「…ああ…」

「実環ちゅーん、本番でーす」

「あ。はーい！ ジャ夕月くん、またね」

「ツツツ。ツー、ツー、ツー…。

「成瀬、そろそろドラマの収録に…」

電話が切れたところを、夕月のマネージャーは見てしまった。

「成瀬！ 誰と話してたんだ…？」

「誰だつていーだろ」

「…………」

(もうと余裕ある… 今日はここに余裕あるんだー。)

「 実環ひや と今日は元氣一杯ですねー 」

「 もうなじとなこじかよー 」

「 」

その夜、またしてもマネージャーと女社長の密議が開かれた。

レポート・ティング出口。

「 おせよひ、ざわこせーす 」

「 おせよひ。 すいふと 」 機嫌ね

「 だつて久々にみんなと会えるんですもん 」

「 …… それは残念ね 」

「 え? 」

女社長は無感動に言った。

「夕月は今日、朝からドラマの収録よ

実環は、自分の足元が底抜けになつた気がした。

「…ビ…」

力を振り絞つて女社長に食つて掛かる。

「どうしてですかー? 夕月くんは“まんべいゆ”の…」

「彼はそれ以前に俳優なのよー!」

ケータイを出して、と言われ、実環は持つていたケータイを差し出した。

「…これが貴女の新しいケータイよ。これからは直々に私がマネージメントを勧めます」

「ー 社長がー?」

「貴女はひとりの歌手なのよー まあ、急いで

腕を引っ張られながら、実環は涙を堪えるのが精一杯だった。

「ビーウー」とだよマネージャー……。」

夕月は、車の後部座席からマネージャーに文句を言った。

「今日は“ばんぺいゆ”のレコードティングが……。」

「お前はひとりの役者なんだ……ケータイを出せ」

「…………う」

夕月は渋々ケータイの交換に応じた。

「自業自得だわ。……お前の自覚の無さがこの結果を招いたんだ。
お前は役者だ、忘れるな」

……こうして、2人は別たれたのだった。

タンジュリン・ヴォイス(9)

「どういひことだー 実環が歌手デビューしてるなんてーー！」

久方ぶりの電話の相手の、第一声がこれだつた。

「そりゃ子供を放り出してる俺たちも俺たちだが、親の承諾ぐらい
得うつてんだつ。だいたい、みつちゃん…嶺文！ 知つてなんで
こんな…」

「だつて面白そうだつたんだもーん」

相手は、電話越しにずつこけた。

「とにかく明日こでも帰国するー実環にもそつとえておカーーー」

ガチャツ。ツー、ツー、ツー…。

「…おはようござります」

西岡はケータイを閉じて溜め息をついた。

「実環ちゃん…バレたよ。」西岡親に歌手デビューの件

「えー？」

「…明日こでも帰国するつてさ」

「うん。

「うわーん。怒られるー。」

「心配しないで。僕あ 実環ちゃんの味方だよ」

「ただ夕月と一緒にいたかつただけなのに…。」

（なんでこんな立て続けに問題が起きたの…？）

ターミナルを取材陣が埋め尽くしている。

「おい、出てきたぞ」

現れたのは、一組の夫婦だった。

「あれが“ハーメド”の元ボーカル、里崎夏実だ」

「隣にいるのは“ハーメド”の元ギタリストで奥方の萬田凜…」

集まつた取材陣の数を見て、夏実はあからさまに眉を潜めた。

「テレビ局の皆さん…それに新聞各社の皆さんも…。何事ですか、この騒ぎは」

「おー人に、お訊きしたいことがあります」

一番手前のインタビュアーがマイクを向けた。

「歌手の里崎実環ちゃん…いやー驚きましたよ

「…………」

「彼女、おー人の一人娘だそうですね」

一方その頃。

「おはよひびきまーす」

「ねえ聞いた!/? 実環ちゃんの話!」

『3分偉人伝』の収録前、ばんぺいゆ3人は女性スタッフの声に足止めされた。

「! 実環がどうかしのか!/?」

「まさかと思つたけどやっぱりよねー」

「うんうん。驚くより先に納得したわよ

ばんpeiゅ3人はお互いに顔を見合せた。

「実環ちゃん、『奇跡の歌声を持つシンガー』里崎夏実の娘なんですかって」

実環が喫茶・歌音にて、事の経緯を話し終えると、夏実は深い溜め息について目を覆つた。

「…」これまでのことはよく分かった…だがな…実環

ハーメドは17年前に結成されたバンド。

ボーカル『Natsu』こと里崎夏実、ギター『Lynn』こと萬田凜、キーボード『Mine』こと西岡嶺文、ドラム『Hach』こと大村八作、ベース『Suda』こと須田千歳で結成されていた。

ところがベース『Suda』の急死によりバンドは解散。

活動1年半という短い間だったが、その間数々のヒット曲を世に送り、今なお語り継がれている伝説のバンドだ。

「その娘が西岡嶺文のプロデュースで歌手デビューしちまつたら、騒ぎになるのも当然だろうて…」

「……せー……」

「まあまあ落ち着きなよ夏ひやさー」

タレーミングよく、元“ハーメド”のアリマードー現喫茶店のマスター、大村がカフエラテを運んでくる。

ちなみにマスターの計らいで店頭には『COSTUME』の札がさがつてこるので、店内には彼等以外に客はない。

「でもこの仕事はお父さんの慈善活動には関係ないの……」

「これから関係していくるから怒つてるんだ……」

「え？」

ハッヒ、夏実は口をつぐんだ。それからブンブンと首を振る。

「とにかく……今すぐその芸能事務所から離れい……」

「……」

そんなことをしたら、もう一度と人前で歌えなくなってしまう。

それ以前に、夕月との接點が無くなってしまう。

「いやー、私、歌手やめなー……」

「うぬやこー……」

実環はビクッと身を縮こませた。

「今から事務所と話をつけてくる！ それまでここから出ぬ」とは
断じて許さん！ 凜、こいつを頼む」

そつ言い残して夏実は出てしまった。

「実環……」

凛は実環にそつと呼び掛けた。

「どうしたの？ 実環。実環は芸能界なんて興味なかつたでしょ」

「…………」

「黙つてないで話して」うんざい

でないと、と凛は続けた。

「お母さん、実環の応援も協力もできないわ」

「……お母さん……」

実環は瞳に張つた涙を拭つと、冷めかけたカフュラテを一口飲んだ。

「……お父さんには内緒よ……？ あのね……」

「どうぞお掛けください」

夏実は女社長に言われるまま、ソファー席に腰掛けた。

「どうも。娘がお世話になつてます」

女社長は「」と応答した。

「今回来たのは、娘を貴社から引退させたく…」

「構いませんよ」

意外な反応に、夏実は目を見開いた。

「けれど私、こんな情報を持つてますの。…貴方が活動を行つてゐる『タンジーリン・リボン』のキャンペーンとして、一夜限りの“ハーメド”復活ライブを催すそうですね」

「!? なぜそれを…それはまだ極秘情報で…」

「実環ちゃんのことを調べてるときに、偶然ですわ」

早い話が…と女社長は笑みを作った。

「ハーメドの復活ライブに夕月たち“ばんぱいゅ”を、スペシャルゲストとして参加させて頂きたいのです」

「…………」

「……悪い話じゃないでしょ、うへ。」

「…………」

夏実はしづかく黙つたままだった。

タンジェリン・ヴォイス(10)

ばんpeiゆは、ここの1年限りで最後となる。

活動休止イベントをどうしようかといつとき、3人の前にある人物が現れた。

「…お前らが、 “ばんpeiゆ” とやらか?」

「… そうですけど…。マネージャー、この人だれ」

夕月の失礼な問いに答えたのは、マネージャーではなく田の前の本人だった。

「里崎夏実。実環の父親だ」

「…?」

「…」

「…?」

「…」

2人は店内に置いてある音楽雑誌から“ばんpeiゆ”の記事を見つけ、女子高生みたいにはしゃいでいた。

「ふう〜ん、なかなかのイケメンじゃない」

「あ、お母さん。顔だけだから力オだけ。中身は超高飛車我儘オレ様主義の何様だ男だから」

凜はブツと吹き出した。……ここまで言われるとは……。

「で、この人のゴーストシンガーやつてたのね？」

「やうよ。シアー中には声が出なくなるし、大変だったんだから」

でも楽しかったなあ……実環は腕に顔をうずめた。

「実環？」

「……戻りたいなあの頃に。夕月くんの側で歌つてみたい。ううん、いつそのこと……」

実環は息を調えてから続けた。

「すき、つて一言だけでも、伝えたいな……」

「……実環……」

母親は気持ちを悟った。これほど淋しげで愛情溢れる声でありながら、全くと言つていいほど恋情が見られない。まあ、それも簡単なスイッチひとつで変わるだろ？が……。

凜は田を伏せると、分かるわ、と一言口にした。

「私も実環と同じ歳のくらいのとき、同じ想いをしたの」

「？ それって？」

「夏ちゃんに出逢ったんだよ」

クッキーを置きながら大村が割り込んでくる。

「だからお父さんがあれだけ言つのも、実環を心配したことなによ。分かつてあげてね。だからその分…」

凜と大村は田を合わせて、ぐつと拳を握り締めた。

「お母さん達が力になつてあげましょー！」

（ー お母さん…）

「あー、凜さん…！」

凜は、SP2人に挟まれて喫茶・歌音から出できた。

「お出掛けですか？」

「ええ。ちょっと実家まで里帰りに」

そして悠々と車に乗り込む。SP2人は報道陣を抑えつつ後部座席に乗り。

「質問なんですが、実環ちゃんの……」

「失礼」

そして車を発進させた。

「……。……実環、もう大丈夫よ」

SP…否、実環と大村は帽子、サングラス、マスクを外した。

「あー息苦しかつたあ……」

「お母さんにできる」とは、じこまでね。あとは自分の力で頑張つて!」

凜は降りると、運転を大村に代わつてもらい、再び走り出す車を見送つた。

「ありがとー! お母さん!」

実環は窓から見えぬよつ、後部座席に横になつた。

このままウジウジしていても何も変わらない。

伝えよつ。自分の気持ちを真つ直ぐに。

「…で」

夏実は刺々しい声で訊いた。

「成瀬夕月つてのは、どいつだ」

「あ。 おれです」

大は偉世を引つ張つて2、3歩あとじせつた。

夏実の手が夕月の耳に伸びる。

「貴様か！ 実環を！ 芸能界に誘い込んだ張本人は！！」

「いででででででで…」

耳から手が離れると、夕月は遠くにいる西岡に視線を送つた。

「正確には西岡さんも同罪で…」

その瞬間の夏実の顔を見てしまつた西岡は、真冬だとこいつのこびつ
しょり冷や汗をかいだ。

「…でも、お父さんも気付いてるでしょ？」

夏実は視線を夕月に戻した。

「実環にはあれだけの歌唱力がある。その気がなくても誰かに目を付けられて、いずれは人前に出てきますよ」

「つ、ああ知ってるもそんなことは。まがりなりにも実環の父親だからな」

「せりすがお父さん」

「お父さん呼ばわりするな！ 貴様に『お父さん』なんて呼ばれる筋合いは……」

「だつて」

「なんだ」

「おれ、実環のこと、好きなんです」

……。
……。
……。
……。

……夏実はあんぐつと顎を外した。

「ゆ、夕月…」

「場の空氣むやんと読んりますか…？」

「おれたちが結ばれたら、夏実さんは義理のお父さんじやないっすか」

なーるほど、ヒヤーに笑い声が響いた。

しかし束の間。

夕月の肩がガシッと掴まれたと思つと、田の前には鬼の形相をした夏実の顔があつた。

「ふざけんなよ成瀬夕月クン。おぢちやんはヒーヒー冗談は大つ嫌いよ？」

「うんにゃ。大真面目つす」

夕月はキッパリと言つた。

「貴様、それがどうこう」とだか分かつてゐのか！？ その言葉を公衆の前で言つてみるー。実環ともどもボロボロになるんだぞ！？」

夏実は食指をビシッと突きつけた。

「もちろん人氣も仕事もパアだー。親としてはそんな奴との交際は認められない！ー」

「……。やつかもしれません。けど」

夕月は、俳優だからこそ可能な男前の顔と声で宣言した。

「おれは一拳両得を田描します」

夏実の指が僅かに下げられた。

「……実環に会つまでのおれは、与えられた仕事を適当にこなすだけの、怠惰な俳優だった。でも、実環と出逢つて変われたんだ」

実環は教えてくれたのだ。1年にも満たない間に、働くといつことがどうことなのか、仕事とはそもそも何なのか。

「仕事の代わりに実環を失つのも、その逆も嫌だ。どっちも大切だから、おれは両方手に入れる」

「…………」

「…………」

「……見せて貰おうじゃないか」

夏実は静かに言つた。

「俺が活動してる『タンジエリン・リボン』のキャンペーンとして、一夜限りの“ハーメド”復活ライブを催す。そこに“ばんべいゆ”の活動休止ライブを行つてもうつ

「えつ」

「僕たちが…」

「“ハーメド”と同じ舞台で？」

「嶺文にはすでに許可をとつてある。ただし俺は公私混同は嫌いだ。貴様はプロの歌手を演じられるか？」

夕月は少しの間だけ、沈黙した。

そして毅然とした態度で。

「…はい。演じてみせます」

言い切つた。

と同時に、楽屋の扉がパーンと開かれた。

「みんな…つて、え！？」

実環は思いもよらぬ人物がいることに涙が出そうになつた。

「なんで！ なんでお父さんが！」

「実環…」

父親は、娘に平手を打つていた。

「これから忙しくなるつての、」自覚しろ。」

「なつ、何よ忙しへなるつて…」

「お前はシンガーソングライターとして毎日ビローするんだ」

…………。

「ええつーつ」

「詳しことは後で話す。帰るわ、実環」

「夕月くん」

「実環、早く来い！」

実環は夕月に紙を渡そうとすつよつた。

「これ、私の新しい電話番号とアドレス。話があるので。お願ひ」

「…………」

夕月は紙を突つ返した。

「返す」

「夕月くん？」

「お前とまじめ話をする

「.....」

（夕田くん）

実環は、自分の心の一部が壊れていくのを感じた。

タンジュリン・ヴォイス(11)

舞台裏は、戦場と化していた。

裏でこつそり様子をうかがつていた凛は、表の様子に思わず息を呑んだ。

「ものす」に数の観客と報道陣ね……」

「うちの商品の実力がお分かりになつて?」

ホホホホホホ、と女社長が笑う。ちやつかり手まで宛がつている。

「6番の靴があつません!」

「あ、こつちにあり……きやつ……?」

駆けてきたスタッフに肩を押されて倒れこむ美環を、誰かの腕が受け止めてくれた。

「……」

「セーフ」

大、偉世、夕月が同時に声を出す。

「あ、ありがと」

「どこへ行つても裏は戦場だな」

「うん、でも頑張る。今日が『ゴーストシンガー』最後だもん」
「そつ…。夕月とキッパリお別れするため」。

「あつ、他人事みたいに！ もうこんな時間よ、準備しなきゃ」

「おつと、いけね」

「最後の最後でトチつたら承知しないからねー」

「おお、任しちきな」

実環は軽く手を振った。

“ばんpeiゆ”が前座で“ハーメド”が2番手だ。

最後の新曲を歌い、“デビュー曲を歌い、メドレーを歌つて、ばんpeiゆのラストライブは終わつた。

「では、今日の主役を『』紹介します。あの伝説のバンド、“ハーメド”のみなさんでーす！」

大の紹介に、ばんpeiゆは静かに舞台を下りた。

「お疲れ様でした」

「次、実環さんですね。緊張します?」

「うー、緊張するわ」

実環はライブの最後に、シンガーソングライターとして再びデビューすることを発表することになつてゐる。

初めて自分で作詞作曲した歌を披露するのだ。

「じゃあ、その緊張をほぐすために、楽屋に来ませんか? 面白いものを見せてあげますから」

夕月はロッカールームへと直行してしまい、楽屋には大と偉世と実環だけがいた。

「あれ、これ、首輪? どなたか猫でも飼つてるんですか?」

「いいえ、と偉世は首を振つた。

「これ、みいちゃんにあげるんだつて、夕月さんがわざわざお忍びで買つてきたものなんです」

実環は今度こそ目を丸くした。…みいちゃんに…?

首輪は白猫に映えるような赤で、古い漫画でしか見ないような金の鈴が付いている。

「夕月の行動を知つて、納得しました。だから、僕たちは貴女が夕月にとつて特別な人なのかなと思つたんです」

夕月が実環の父親の前で告白したことは、本人が卒倒しそうだから言わないでおく。

「…貴女は、夕月がどんな暴言を吐いても、ブンブン怒りながらも受け入れていたでしょう。夕月に必要なのは、きっとそういう人なんですね」

「え？」

「どんなことをしても、決して嫌いにならない人。傍にいることを許してくれる人。何をしても許してくれて、絶対に好きでいてくれる人」

実環は夕月の我が儘に、黙つてわけではない。ブンブン怒つて、言いたい放題言つて、そして最後は許してきた。

「夕月さんを、どうかよろしくお願ひします。あんな性格ののも、母親に愛されず父親に頼れなかつたせいなんですね」

「それは…知つてゐるけど…」

「でしょ「う」… そうやって、実環さんは夕月さんを理解してゐるじゃないですか。… 両親に甘えられなかつたから、夕月さんはどんな無

茶も我が儘も甘えもきいてくれる人を、必要としていたんじゃないですか」

大が長く嘆息した。

「夕月は、確かにどうしようもない男です。あんなどうしようもない男を受け入れられる女性なんて、絶対いません。どんなに心の広い女性でも、3田で出していくに決まっています」

「…私、お母さんじやないんですよ。それにあの高飛車我儘オレ様主義の何様だ男と一生付き合えっていうんですか。もれなくドン底の人生が付いてくるのに」

大と偉世は言葉に詰まつた。それを言われると痛い。

「ででででも、嫌いじやないでしょ？」「

「嫌いですよ。大つ嫌い。あんな男と一生付き合えなんて[冗談じやない。ゾッとする」

実環は首輪を返して立ち上がつた。

「もう行きます。どのみち夕月くんに嫌われちゃいましたから、そんな話しだやなりません」

ふいっと、実環はステージに向かつた。

「… それでは今回の影の主役を紹介しまーす」

ジャジャーン、とこ「う音と共に西岡が声を張り上げた。

「今回のキャンペーンソングを作つてくださつた、シンガーソングライター里崎実環～！」

ギター一本で現れた途端、観客席から『きやー』といつ興奮が怒濤のように押し寄せてきた。

「… みなさん。今日は当ライブに来ていただき、ありがとうございます。新人のシンガーソングライターでありながら、最初からこんな大きな仕事を貰えて感激です」

実環ちゃん、といつ声に彼女は手を振る。

「… 私は歌が好きですし、それは今も変わりません。ただひとつだけ、私を変えたものがあります」

観客席が水をうつたように静かになる。

「…『元気』…です」

元気は私にいろんなことを教えてくれました。楽しいことや、辛いことも…。実環は続ける。

「そんな『元気』が皆様にも届きますよつこと、この曲を書きまし
た」

曲名は……と実環は調律をしながら囁いた。

「『Tangerine Voice』……元気を色に例えたり蜜柑色だと思つたからです。……それでは、お聴きください」

そして、ギターをかき鳴らす。

「……お「タマコ」で蜜柑……素敵な幸せ……隣には貴方……」

あれ？ と観客のひとりが首をかしげた。

「！」の声……夕月に似てる

「やつ言われてみると……」

「あ、私もやつ思つた……」

「なにこれ……デジヤブ？」

「lu lu lu la la... tangerine voice
e... 今すぐここに駆けてよ... lu lu lu la la... ta
n y a r e n e v o i c e... 貴方の素敵なお声で...」

会場は、疑問と拍手に満たされた。

こうして里崎実環の、シンガーソングライターとしての初ライブは幕を閉じたのだ。

タンジヒリン・ウォイス(12)

「ライブは無事に終わり……。

実環はすぐに帰れるよつ、荷物の整理をしていた。

「実環ちやん」

と、スタッフのひとりに声をかけられた。

「急いで。打ち上げ始まつたやつよ」

「あ、ハイ」

当然、打ち上げに行ひつと楽屋の扉を閉め、踵を返した途端……。

ぎゅつと、腕を掴まれた。

(……え……?)

誰だのひつ……反射的に振り返ると。

「タユくん……」

「……ど」「行くんだよ」

「どうして…打ち上げ

言つと、夕月は面白くなさそつた顔をした。

「ついてこい

「ついてこい、つて、ちょ、ちょっと待つて…

「待たない

すると、夕月は実環の身体を軽々とお姫様だっこした。

「ばつ、なにすんのよ…」

「おれの首に腕をまわせ。…暴れるな。全速力で走るから、暴れた
拍子に唇がぶつかるかもしねいぞ」

すると、実環は凍りついたように大人しくなった。

夕月はチッと舌打ちした。

「…そこまで厭がることないだろ…」

…実環と夕月はじつして会場から去つた。

「遅いな～夕月たち

馬鹿正直に夕月と実環を待つていた面々だったが、そこに夕月のマネージャーが駆け込んできたことで表情が一変した。

何かあつたのだ、と。

「失礼します……夕月が、里崎さんのお嬢さんと逃げました

……。

「はああああ！？」

「私も追いかけたのですが、行方が分からず……。ファンにも見付かって、いま外は大騒ぎになつてます」

すみません！」と勢いよく頭を下げるマネージャー。これに反応したのは、実環と一番関係の深い人物だった。

「……はあ……頭痛のタネが増えそつだ……」

西岡と大村は顔を見合せると、それぞれ持つていたグラスを夏実の持つグラスにカチンとぶつけた。

「いいかげんに折れなよ、夏ちゃん」

外は雨が降りだしていた。

喫茶・歌音。

マスター大村が不在のため鍵がかかっていたが、入り口には雨よけにはなるくらいの屋根が付いていた。

夕月と実環はそこまで逃げていた。路地裏の喫茶店（休業中）ならまず見付かるまい。

「あ～あ、こんなに濡れちゃって…」

実環は持っていたハンカチで夕月の顔を拭いた。ハンカチが前髪に差し掛かったとき、くすつ、と実環は無意識に笑ってしまった。

「…なんだよ」

「いや。やっぱり、夕月くんの顔は好きだなあ。歌は全然だけど」

「ゴーストシンガーに言われたくない」

「だつて歌つたらバレちゃうじやん。お父さんの声に似てるって西岡さんにも言われたし。ハーメドのボーカルとギタリストの娘なんてバレたら、今回みたいな大騒ぎになっちゃうもん」

だから、人前で歌いたくても、歌えなかつた。

あの結婚式で歌わなければ、彼女のステージはカラオケボックスだけ。

「…大さんと偉世つちには夕月くんのこと、大嫌いだつて言つたけ

ど、ホントは嫌こじやないよ。でも私は夕用くんのお母さんじゃないの」

「はあ？ キショイーと書うつな。お前を母親だなんて思つたことはない」

「まあなんでもいいよ。でもそつねえ、一度くらこ言つてあげてもいいかな。『分かったよ。傍にいればいいんでしょ。しうつがないからずっと一緒にいてあげるよ』って」

夕用は目を瞬いた。

「今せら何があつたつて、ちゃんと好きでいてあげるよ。ハッキリ言つて私の中で、夕用くんの評価はドン底なんだよ？ それでも好きでいてあげてるんだから。…知つてる。そーやつて夕用くんの傍にこむことは、私には難しくないんだつてこと」

「じゃあやれ

「最後までヒラソーネあんたは一何よ今せら。話があるつて言つたのにアド突つ返すし」

「あれは…つ…」

夕用は言葉に詰まり、それから真実をポツポツと語り始める。

「お前の親父さんと…約束…ライブが終わるまで、公私混同はなしで、プロの歌手に徹しきつて…」

意味を悟つた実環は真つ赤になつた。2人は同時に視線を逸らし、

互いに話題を棚上げにした。

「しかし… タンジューリン・ヴォイスねえ」

「… 何よ。なんか文句ある?」

「いや。おれに『ピッタリだなあと思つて。言わなかつたつけ、おれの本名』

「… 言つてない」

「成瀬柚樹つてんだ」

実環はぽかんと口を開けた。

「… ナリセ・ユヅキは、芸名だ」

2人は互いに黙つたままだつたが、やがて顔を見合させてクスクス笑つた。

「… わつきの言葉、取り消すわ」

「なに?」

実環は疲れきつたように夕日に身を預けた。

「大好きよ。夕月くん」

染まつてゆく。

世界が、大好きな蜜柑色に。

オレンジ色した街灯に照らされて。

2つの影は雨の中…ひとつに、重なった。

⋮数日後。

「ええーっ」

実環は夕月の言葉に不満な声をあげた。

「仕方ないだる。『3分偉人伝』でも活動休止ライブやるつて、おれだつて急に言われたんだから」

「そんなん。夕月くんと初めてのデートだつたのに…」

ふと、バッグを持っていない方の手を夕月に握られる。

「行くぞ」

「うんっ」

…データの続きを、ステージの裏で。

了

「お詫び申します。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5576j/>

Tangerine Voice

2011年4月9日09時47分発行